

佐伯時代の独歩の手紙(上)

山内武麟

(賛助会員・佐伯市城下東町)

『国木田独歩全集』(学習研究社発行)の第五巻の中に明治二十三年五月から四十一年六月の間、即ち大体青年期から歿年に至るまでの十八年間の書簡三百二十通を収めてある。これはこの間に友人に宛てゝ出したものであるが、全部ではあるまい。独歩の没後収集されたもののみで、未収集のものが相当あったに違いない。この書簡は『欺かざるの記』と並んで彼の生活史、思想史を語る好材料である。

手紙といえは普通日常生活と結びついた用向などを知らせるのが目的であるが、独歩の手紙の場合その趣きを異にし、用事だけ書いたものは割合に少なく、多くの場合彼自身の思想や感情の告白と日常生活記録の報告が主であった。だから内容に客観性があって読物として興味多いものである。

こゝに明治二十六年十月から二十七年七月までの佐伯に在住していた間に、友人に出した手紙の内容の主なことを挙げて、佐伯に於ける独歩の生活と思想感情を見ることにする。

十月一日(佐伯に着いた翌日)に田村三治と中桐確太郎に手紙を出している。田村にははがきで佐伯に無事に着いたこと報らせ、中桐には封書で佐伯に来た心情を吐露している。

自由の児は半ば束縛ばくの絆きずなにかかりぬ。希望の児は半ば失望の鬼に捕はれぬ。平和の児は半ば煩悶の蛇に吞まれぬ。

とある。今まで大都会で自由気ままな生活をしてきた若者が、食うためとは言え、九州の片田舎に来たのである

から、心から悔やんでいるのは無理もない。島流しにでも会ったような気持であつたであろう。

また、

二十一日夜今井忠治氏に送られて独影蕭然京を發したる彼は三十日の正午満腹の不平を殺して佐伯に入り

ぬ

ともある。不平満々であつたに違いない。

しかし、次に、佐伯のことはまだよく分らない。自分はどこまでも神の愛を信じるので、どこまでも忍耐する積りであるが、自由を奪われることが度を過ぎるようであつたら蹶然とこゝから去るであらう。と決意を述べている。そして、

友あり遠方にあれども弟あり傍にあり、之れせめてもの慰みなり

と、結んである。親しい友は遠く離れてさびしく不安であるが、弟収二を連れて来ているのでせめてもの慰みであると知らせてある。

十月六日には大久保余所五郎に宛て、手紙を出している。

九月三十日無事に佐伯に着き、万事好都合に運んで一昨日から授業を始めたと知らせて、到着した二三日は一種の抑圧を感じて不平であつたが、今は多少土地になれて来た。まだよく分らないが、自分に對しては不満はないらしいと安心させている。そして、

東京に在りて交際よりはなれ世間より遠ざかり只だ思想界にのみ逍遥したる小生が、今度は生徒を相手に致し、有志を相手に致し、ナショナルを携へ、スキン Ton を手に致し、何時の間にやらカーライルも遠ざかり、ウォーズウォースも遠ざかり、エマルソンも遠ざかり、冥想より遠ざかり、幽思より遠ざかり、精神界の進歩を止め、徒らに齷齪として日を送らねばならぬ境遇となりたるは真に不運とや申すべき。

と、生活が變つたことは不運であると、わが身をかこちながらも、この佐伯のことを

佐伯は山水の風景には意外に富み、山あり河あり海あり、郊外の散歩に至極妙に候食物は魚類沢山ゆへ毎日さし身の馳走あり滋養には差つかへ御座なく候

と、佐伯の風光の美しさをたたえ、魚の多いことを喜んで、満足の意を表している。

次に学校の模様について、生徒の気風はまだよく解らないが、一寸見たところ意気さかんで大きな志をもっている者も見受けない。生徒の中、年長者の大半は職業に従事していて、裁判所に出るとか銀行に務めるとかで、純然たる学生は少ない。授業は午後三時半より五時半までと、八時半から十時半までの四時間である。二部教授で前は低学年、後は高学年であったのである。講義はナショナル、スキントン万国史、ヘスチング伝、其他文典読方、別に代数学を受け持って一週二十三時間ばかりの労働であると知らせてある。

ちなみに代数学はチャーレー・スミスの訳書を用い、万国史は原書を使っていたという。

そして最後に、自分には信ずる天職がある。一教師の椅子に安坐することは出来ない。と覚悟の程を示している。

十月十日には田村三治に手紙を出して、学校のことは万事うまくいっている。と安心させて、佐伯のことを

佐伯と申す処は気候も悪しからず、且つ風景に富み魚類多く、以て生活に容易なる地なれば此等の点より

言へば小生も亦た不平なし。と、書いて、一応満足している。そして

佐伯に來りて僅か十日而して既に三個の山に登り候其の最後は則ち一昨日の日曜日、尺間山と稱する佐伯を去る三里の高峰に攀ち、終日峰より峰、谷より谷を涉りて暮し候

と、知らせて、その健脚ぶりを示している。あとの二つの山は、佐伯に來た翌日の十月一日午後二と城山に登り、七日は金比羅山（煙草山）に二人で登ったのである。

十月二十五日には中桐確太郎に長い手紙を出している。先ず初めに

君よ安ぜよ、洪水は随分甚だしかりしも吾等兄弟は只だ二回転居して之を避けたるのみ、別に一物の損害をも被らざりし也、而して己に全く平日に復し又た洪水の跡さへ見る可からざる程に至りぬ。大分県下に佐伯は水害尤も軽かりし也

と、水害見舞の礼を述べてある。佐伯地方は十月十三日の夜台風が襲來して暴風雨となり出水した。この洪水で池船橋が流失した。

次に、中桐が民友社に入社して、家庭叢書の編集に當ることになったことに祝辞を述べ、

自分のことについて、僕は目下の事情は至極安静で、学校の教授に毎日務めている。先方の気に入らねばそれまでと、無頓着にかまえたが自分の尽すべき職分と、信じることを正直に励んでいるので、案外自由で心が安らかである。しかし三十名ばかりの青少年が自分の支配感化示教の下にあることを思うと責任の重さを感じ心ひそかに恐れるところもある。

と、自分の生活の現状を知らせてある。

しかし、自分の精神上的の苦闘は少しもおさまらない。神を信じ神に任かせてあるが色々な煩悶があると、次のように告白している。

存在、人性、自然等の疑問と煩悶は少しも止まず。

山に登りて感じ、谷を歩いて思ひ、夕陽を遠山に眺め、朝輝を曉雲に望む時、他郷に在りて自然に親しく交はり、人間を傍より見、人生を特別に感ずるに従ひ大なる煩悶は心底最も微なる辺より湧き来りて暫時も止まず。

と、しかしまた、今自分は「自然」という、大で深い意

味をもつ書物の前に立っている。今の境遇ほど自分を取囲んでその美と変化を示したことはない。山がある。その山腹から霞が立ち昇っている。夕陽はその頂に残る。月もその上にかゝっている。泉がその谷を流れる。むぎわらぶきの家はその麓で村を作っている。河がある、帆かけ船は漁師を思わせ、漁歌は漁婦を思わせるのはこの町である。山上から見下ろせば人間社会の活きた面を見せてくれる。寂莫の谷がある。沈思するによい。海がある、煙波がかすかに覆い一種の哀感をもたらせてくれる。天高く秋は深し、と佐伯の自然風物を嘆賞し、自分は毎日このような書物をひもといているのだと、誇っている。

十月二十八日には大久保余所五郎に手紙を出している
先ず大久保からの洪水見舞の札を述べて

只今は最早洪水の跡もなし、秋日日に麗はしく農夫は刈入れにいそがしく、百舌鳥は樹上に喧しく、紅葉は山寺の門の傍に静かなり

と、書いてある。

そして次に大久保が先の手紙で独歩に、君のこん度の佐伯行は確かにリアリティ（真実）に基くものであるか

ら、佐伯にもリアリテイを持続するように、と忠告した。

これに対して独歩はその通りだと感謝して、

人間の生命、一日一時一分たりとも虚なる者あるな

し。眠も実なり誇るも実なり。かく小生が文字を書く

事も実なり。皆な生命の一部分を成しつゝあるなり。

全力をこめて大に反省致し成す所なくして可ならん。

況んや教師としてかりそみにも子弟の上に立つ可き職

分に於てをや

と、自分の決意を示している。

十月二十九日出した田村三治宛の手紙には佐伯にある

教会のことを知らせてある。

茲に一つ実に愉快なる事有之候、此事は大兄に報知する事丈けにても小生の心何となく躍る程に候、と書き出して、それは外でもない。当地の教会のことで、当地に一つの教会がある。薬師寺育造氏といって以前関西学院に在学していた青年がこれを監督している。会員は十二名でその中出席出来ない四人を除けばあとは大概出席する。みんな青年である。そしてその中の半分は自分の学校の生徒である。自分は已に聖書会に二回、祈祷会に一

度出席した。明日は日曜日だから出席して感話する積り

である。会員たちは自分が佐伯に來たことを大変喜んで

祈祷の際神に感謝を捧げている。讚美歌の時は三四の青

年は声はり上げて歌い、祈祷の時は涙を呑みながら祈る。

悉くまじめで熱心である。自分も思わず涙を流す。自分

は出来るだけ教会のために尽す覚悟である。たゞ直接生

徒に伝道することは禁じられているので出来ないが、青

年の風紀は自分が来て以来良くなっていると聞いて喜んで

いる。と教会のことを、熱心なクリスチャンである友人

田村に報らせて喜ばしている。

十一月二十五日附で大久保余所五郎に、また二十七日

附で田村三治に手紙を出しているが、どちらも十一月十

八日の午後から尺間山に第二回目の登山をし、山上のあ

ばらやの宿屋へ一泊して、その晩は絶頂の岩の上から折

からの明月を仰ぎ、翌朝は山頂での日の出を拝し、その

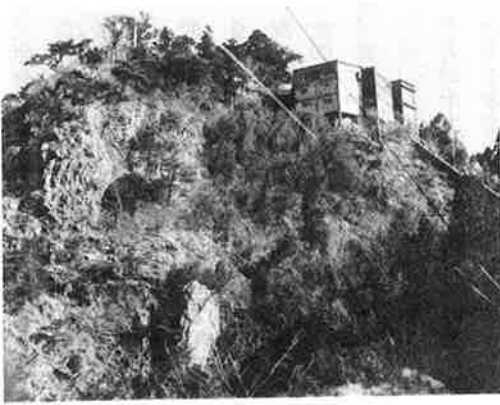
日は山から山、谷から谷へと渡ってとうとう彦岳へ登っ

て、霞ヶ浦に下りて帰宅したことを報らせてある。その

中で田村宛の手紙は詳しく記述し、登山記を読むよう

である。それを要約すると、

十一月十八日は土曜日で校務は三時までであったのに、生徒にことわって二時までとし、二時すぎ家に帰って弟とすぐ尺間山目ざして出発した。第二回目の登山である。今度は山上で一泊する予定で、三度分のむすび二人前と毛布二枚を用意して担い、麗かな秋の陽を少し斜に受けて、愉快な気分を水素とし、体を軽気球として浮くように飛ぶように歩いたが、さすがの軽気球も山の麓にかゝると、余り浮き浮きとは登れなくなった。何といっても



尺間岳 神社はかくれて見えない

二人は毛布、
弁当、寒さ
用意の衣類
やらの荷物
を背負って
いるので水
素ガスも不
足し青いき
ときであ
った。この
日の道は植
松の愛宕神

社の裏から山の尾伝いに登ったのである。休んでは登り、また休みして薄暗い森や灌木の林などをすぎて、山の腰を巡ってようやく四方の風景を見下ろす所まで来た。この時夕陽は西に傾き、連山の頂の空は真赤に染まり、西の方はらかなたへ阿蘇山の煙かた雲か紫色に染まっていた。

こゝに愉快なことがあった。自分達がまだこゝまで登らないうち森や林を登るところで一休みした。この所は以前登って下りるとき、一人の老人と一人の少年とに出会った所で、その老いた樵夫の如何にも衰えた様子と、この老人を先導する少年の無邪気らしさが、自分の頭に残って何時までも忘れられなくて、尺間を思う度にこの二人のことを連想していた。自分達はそこで休憩して持参した蜜柑を食べながら思い出話をし、また登りかゝって十分余り歩いたとき、収二がおやと叫ぶ。何かと問うと帽子がないという。どうしたと云いながらあたりを見廻したが帽子はない。きつとあの休んだところに置き忘れたのである。もう大分登ったので取り返しに下りる勇気も少ない。ところがこの帽子にはいわれがある。これは水谷真熊君から貰った記念の品である。今度冬休みに

は熊本へ旅行する予定で、その時水谷君に会い、この帽子もその時の話題の一つになるであろう。この帽子を捨て、はならない。水谷君を山中に置き去るような気がする。と収二は再び引返して帽子を拾って来た。

そして西に夕陽を眺め、頭上には月の光を澄んだ空に仰ぎながら、とうとう頂上に登りついた。その時は全く夜で、月光は霜のように寂莫の気が天地にこめていた。

尺間山の山頂には尺間神社と云う社がある。絶頂に近いあたりは岩石が突き立って、社はそのてっぺんにあり、鎖によって登られるほどの絶壁である。しかし不思議にもその岩石の間に二三軒の茅屋があつて、この社に祈願に参つた信徒を泊めるのである。しかもこの二三軒は軒を並べるのでなく、岩や樹木に隔てられて全く独立した一軒家である。行き来するには鎖の厄介にならねばならない。自分たちはその家に泊つた。

「もーし、宿を借しますか」と障子をあけて頭を差し入れて問うたのは自分である。室内を見るとぼんやりとして片隅の一つの炉がある。自在かぎに大鍋をかけ、その傍に年増の女と十三四才位の少女が座っている。男気は全くない。もしこの二人が荒くれ男であつたら、全く山賊の住家と云つてよいほどに荒れ果てゝいた。宿泊することになつて収二と上つて炉の傍に坐した。全く木賃

宿である。

年増の女は年の頃三十四五ぐらいで、一眼がすが目でつゝぼを着ていて訛りのある言葉で話す。少女は白杵の者で願ほどきに一週間籠るのでこゝに泊つていた。

二人の婦女と語りながら、むすびを食つて外に出てみた。その景色を次のように記してある。

月光屋の如し、今こそ巖の絶頂に上りて思ふまゝに此の明月に向い候。身は只だ天地茫茫の際に漂ふが如く思ひ悠々として窮まる処を知らず、自然に對しては自然の無辺を思ひ、月光に向ては美の無限を思ふ。

と、心ゆくまで月の美を觀賞している。この明月をこの巖頭に眺めたいと考えてこの登山を計画したのである。

下界を見ると狭霧きさきが霜の如くたちこめ、山も野も谷もその底に眠り、男も女も親も子も家族も社会も時代も歴史も恋も恨も欲も何もかもその底に包まれている。仰ぎ見ると無限無窮の天空が悠々と拡がっている。星も月も太陽も木星金星銀河ありとあらゆるものがその間にみちみちている。と展望を叙してある。

その晩はこの茅屋に泊り、翌十九日の日曜日是一日中山から山へと歩き廻つてとうとう彦岳という高い山に登り、日暮れ時ようやく家に帰りついた。その頃には月の光が宵の煙の香にしみ初めた頃であつた。と書いてある。

(つづく)